

こ数年、福岡市朝倉市の女男石と呼ばれる歴史的水利施設の保存に関わってきた。道路拡幅により、影響を受けるため歴史的な価値の有無を確認して欲しいといわれ現地を確認した。規模は小さいが甲府盆地の信玄堤と類似の優れた水利施設で、現在もほぼ完全な形で残っていることに驚いた。関係者の努力により、道路計画は変更され、この春、県の文化財として指定され、現役保存が決まった。

女男石は秋月藩の家老堀平右衛門が構築したと伝えられる江戸時代初期の構造物である。小石原川が大きく湾曲する右岸水衝部に位置する扇状地扇端部の治水水利水の複合機能を持った水利施設である。湾曲部の外岸側に女男石と呼ばれる大きな二つの岩を配置し、その上下流の河岸沿いの河床には巨石を敷設することにより、洪水のエネルギーを減勢する構造物である。女男石群によって、河道は扇状地の南側に固定され、右岸側への安定的な取水を可能とするとともに、流路を固定し、洪水流を安定的に流す治水機能を有していると推察される。

この水利施設は現代的な視点からみて、重要な視点がある。一つは四〇〇年を経ても依然として現役施設として機能しているという点である。巨石を用いたため材料は劣化せず、構造的にも安定している。また維持補修が続けられてきたことも長持ちの要点である。

また、機能的には流速低減あるいは減勢の技

各 人 各 説

歴史に残るものを作る

九州大学大学院工学研究院環境社会部門流域システム研究室 教授

島谷幸宏

Yukihiko Shimatani



術が用いられている点である。近代河川技術の基本思想は水をなるべく早く排除することであった。従って流速低減技術は近世から現代に十分に受け継がれてはいない。水を早く流すことが、結果的に水を集め、水害を頻発させているという、気候変動下の国際認識からすると、水をゆっくり流す技術は今日的に重要である。

今年の六月、ドイツのボンの国連大学でP E D E R R と呼ばれるE c o o i D R R の国際会議が開催された。E c o o i D R R とはEcology based disaster risk reduction の略で、生態系に基づいた防災・減災のことである。カトリックナ台風後にカキ礁などの生態系を活用した減災が注目されている。私はこの会議で、日本における水害防備林や霞堤などの伝統的治水工法とE c o o i D R R の関係について話をさせていただいた。欧米ではすでに伝統的な工法は失われていて、先進国で伝統技術が残っている日本の知識は貴重であり、もっと知りたいという声がたくさん聴かれた。伝統・文化は国際的に尊敬されるのである。

現在の私たちは歴史の中の一瞬を生きている。私たちのこの時代の土木施設が歴史に耐えてどれくらいのもので残っていくのだろうか。計画の正当性、施工の丁寧さ、材料の丈夫さ、構造の安定性、美しさなどが、歴史の経過に耐える土木施設の要点と思うが、各人がそれぞれの土木施設を歴史に残そうという気概こそ重要である。